

お役にたつならば、たいへん嬉しく思う。

最後になったが、私達が地質調査所を退職して以来、長期間にわたってこの原稿に手をいれ、体裁をととのえ、印刷公表できるまでにこぎつけて下さった遠藤祐二 海外資源特別研究官に厚くお礼を申し上げる。

文 献

河内洋佑 (1988) : 新しい重液. Magma, no. 82, p.31
 Krumbein, W. C. and Pettijohn, F. J. (1938) : Manual of Sedimentary Petrography. Appleton-Century-Crofts Inc., New York, 549p.
 黒田吉益・諏訪兼位 (1983) : 偏光顕微鏡と岩石鉱物(第2版). 共立出版, 343p.
 Milner, H. B. (1962) : Sedimentary Petrography. Vol. II, 4th Rev. Ed., George Allen and Unwin Ltd., London

715p.
 都城秋穂・久城育夫 (1972) : 岩石学 I. 共立出版, 219p
 Pettijohn, F. J., Potter, P. E. and Siever, R. (1972) : Sand and Sandstone. Springer-Verlag, Berlin, 618p.
 佐藤良昭 (1971) : 重鉱物研究の現状と問題点. 地調月報, 22 487-499
 Tanaka, K. and Katada, M. (1969) : Color Index. Bull. Geol. Surv. Japan, 20, 509-510, 16 pl.
 Tickell, F. G. (1965) : The Techniques of Sedimentary Mineralogy. Elsevier Publish. Co., Amsterdam, 220p

SATO Yoshiaki and SUZUKI Taisuke (1991) : Heavy mineral analysis.

<受付: 1991年4月30日>

中国の鉱業情勢

大慶石油管理局

—中国鉱山企業の現況案内—

<中国経済新聞>1990. 12. 17より

大慶石油管理局は国営超大型企業で、全中国 100 大企業のトップに位置し、所管する油田は世界にも数少ない年産原油量 5,000 万 t の超特大油田の一つである。

大慶油田は黒竜江省西部の松嫩平原にあって、油田の面積は 5,470km²、原油の地質鉱量は 48億 t である。現在の職員・工具数は 219,500 名、固定資産総額は 128 億元である。

1959年 9 月26日の松基 3 号井の噴油が大慶油田の誕生とされている。その後1960年 3 月に、国務院と中国共産党中央幹部会の承認を経て、石油工業部が全国の石油企業の力を結集して大慶での石油探査活動を組織し、大慶油田の全面的探鉱と開発の序幕が切って落とされたのである。

この30年来、政府と上部機関、国民と軍隊の支援、油田で働く人々の努力によって、生産と管理の上で次の様な成果を収めてきた。

1. 生産した原油は累計10億 t、生産・販売した天然ガスは累計 146 億m³である。

2. 石油の地質鉱量が全面的探鉱開始時の26億 t から 48億 t に増加した。

3. 年間原油産出量が 5,000 万 t の水準を14年連続して維持し、生産が安定している。

4. 国家財政に累計 779 億元を納め、その額は同じ期間に国家が本油田に投資した総額の11.8倍に相当し、同時に輸出原油 2 億 t を国家に提供し、それが国家に外貨 280億ドルをもたらした。

5. 石油と天然ガスの生産を主体とし、工業と農業の発展と比較的調和した、機能が比較的整った、新しいタイプの都市を建設した。

6. 生産の発展に努める中で、国策を堅持する、英雄的精神に学び鍛えられた油田技師・油田労働者の隊伍を生んだ。

(決意の項目は省略)

所在地: 黒竜江省大慶市

局長: 王志武

ファックス: 81050

電報略号: 2646

電話: 33684 33682

郵便番号: 163003

(岸本文男訳)